

## 〈提 題〉

## 古代ギリシア・ローマにおける「自由学芸」の教育

納 富 信 留

中世に成立して今日に受け継がれる「自由学芸」について、アウグスティヌスから中世の状況は日本でも研究が進んでいる<sup>1)</sup>。他方で、その背景をなすと考えられる古代ギリシアの状況について、まとまった研究はない。一般に「自由学芸」はギリシアの学問や教育を受け継ぐものと説明されているが、その通説には問題が多い。ギリシア古典期における学問・教育のあり方は多様で、異なった理念が衝突しており、後世の「7科」に対応する枠組みは存在しないからである。本報告では、前5～4世紀のギリシアに遡って、「自由学芸」の背景や伝統形成の経緯を探っていく。

## — “ἐγκύκλιος παιδεία” の名称

「自由学芸」(artes liberales) と呼ばれる教育の理念は、ギリシア語の“ἐγκύκλιος παιδεία”に当たるとされる(後述セネカの証言)。だが、古典期からヘレニズム期のギリシアで、この言葉は、明瞭に広く用いられていたとは言いがたい。

## (1) 古アカデミア

“ἐγκύκλιος”は「円環をなす」を原義とし「周期的な、日常の、普通の」という意味を持つ形容詞で、前5～4世紀には悲喜劇や天文学関係で使われている。「自由学芸」に関わるかもしれない用例は、プラトンの学

1) H. I. マルー『アウグスティヌスと古代教養の終焉』、岩村清太訳、知泉書館、2008年(原著、1938年)、ピエール・リシュ『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』、岩村清太訳、知泉書館、2002年の他、岩村清太による『アウグスティヌスにおける教育』、創文社、2001年、『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』、知泉書館、2007年等の研究がある。ローマについては、小林雅夫『古代ローマのヒューマニズム』、原書房、2010年がある。

園アカデメイアの周辺に見られる。

プラトンの弟子でポントス出身のヘラクレイデスの断片には、オルフェウスの文化貢献に関係して、“ἐγκύκλιος μάθησις”という表現が登場する(Fr. 159 Wehrli)<sup>2)</sup>。また、アカデメイア第3代学頭クセノクラテスについて、次の報告がある。

「クセノクラテスが、ἐγκύκλια μαθήματα を修得せずに学校で学ぼうとする者に、こう言った。『去れ、君は哲学に対する手がかりを持っていない。これらで魂を柔軟にしておく必要があるのだ』と。」(Fr. 57 Parente)

哲学の前に修めておくべき学科とは、「幾何学・天文学・詩・文法」(Fr. 56), 「幾何学・音楽」(Fr. 58), 「文法」(Fr. 59), 「諸学科」(Fr. 60)である。これはプラトン『ポリテイア』が示す教育課程(第1段階と第2段階の混在?)に対応し、アカデメイアの入り口に掲げられていたとされる「幾何学を学ばざる者、入るべからず」(ἀγεωμέτρητος μηδὲς εἰσίτω)の標語を連想させる。これら初期の例は、哲学と区別された予備教育が“ἐγκύκλιος”として認識され始めている可能性も示唆するが、証言は後世のもので確実な証拠とは言えない。

アリストテレスは哲学の専門家向けの論考とは別に、一般に向けて書かれた論考を“ἐγκύκλιος”と呼び、「出回っている」といった意味で用いている<sup>3)</sup>。だが、その語義については諸説ある。

## (2) ヘレニズム哲学諸派

古アカデメイア以外でも、ヘレニズムの哲学諸派に関する証言でこの語が散見される。キュニコス派は“τὰ ἐγκύκλια μαθήματα”を無視したとされ、アンティステネスによる文法(γράμματα, 文芸?)学習の否定を始め、一般に幾何学や音楽が無視されたことが報告されている(ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』(DL) 6.103)。また、ソクラテスの流れを汲むキュレネ派のアリスティッポスは、“τὰ ἐγκύκλια παιδεύματα”に

2) エウリピデス『レース』346への古注。

3) 『ニコマコス倫理学』1. 5, 1096a2 τὰ ἐγκύκλια, 『天体論』1. 9, 279a30 ἐγκύκλια φιλοσοφήματα。

従事して哲学を軽視する者を批判したとされる (DL 2.79)。ただし、同様の言及はストア派のアリストンについてもなされており (SVF I. 350)、哲学者が一般学問に対してとる否定的態度の一般表現であった可能性が高い。

エピクロスは概して詩や学芸に批判的であったことが知られるが、「一般教養の入門秘儀に与らずに」(ἐγκυκλίου παιδείας ἀμύητος) 哲学に進んだ者を祝福したとされる (アテナイオス『食卓の賢人たち』13. 588a)。

ヘレニズム期のストア派でも、一般教育を巡って議論があったようである。キティオンのゼノンは、『国家』の最初で“ἐγκύκλιος παιδεία”が必要だと主張したという (DL 7.32 = SVF I. 259)。一般教育の軽視は既述のアリストンの逸話にも見られるが、それに対してクリュシッポスは、“τὰ ἐγκύκλια μαθήματα”の有用性を主張したという (DL 7.129 = SVF III. 738, cf. III. 224)。また、ポセイドニオスは学術を分類し、若者が学ぶべき学問を“ἐγκυκλίους”としている (Fr. 90 Kidd)<sup>4)</sup>。この報告を収めるセネカ『道徳書簡集』88.23では、このギリシア語をローマ人が“artes liberales”と呼ぶものとしている。ストア派はしばしば内部で学説対立があったが、この論点をめぐっても対立、あるいは強調点の違いがあったことが推察される。

これらの証言から、哲学専門と区別された一般教育が行われており、多くの哲学者がそれに否定的に接していたことが示唆される。ただし、それらは後世の出典であり、ヘレニズム期に“ἐγκύκλιος”の語で明確に議論されていたとは断言できない。一般的な状況や事態の記述に、後世の語彙が投影されている可能性が高いからである。

### (3) アレクサンドリアの状況

この点で注目されるのは、ヘレニズム期後半のアレクサンドリアである。古典期からヘレニズム期にアテナイを拠点とした哲学者たちに比して、前1～後1世紀にアレクサンドリアで活躍したフィロンは、著作の多くの箇所“ἐγκύκλιος παιδεία”の語を用いているからである<sup>5)</sup>。前1世紀には、

4) I. G. Kidd, *Posidoniūs: Fragments II, Commentary*, Cambridge UP., 2004, 359-365 は、セネカとポセイドニオスの間で“liberales artes”理解に相違があり、混乱が生じていると論じる。

5) *Legum allegoriarum* 3. 167, 3. 244 (bis), *De cherubim* 3. 6, 102, 104, 105, *De sacrificiis Abelis et Caini* 38, 43, 44, *De posteritate Caini* 137, *De gigantibus* 60 (?), *De agricultura* 9, 18, *De*

ハリカルナッソスのディオニュシオス（『デモステネス論』15.4, 『トゥキキュディデス論』50, 『文章構成法』25等）やシチリアのディオドロス（『歴史の図書館』33.7.7）に若干の用例があり、少し前のポセイドニオスと合わせて、この理念が普及し始めていたことは間違いない。ただし、その中でもフィロンの用例は突出しており、アレクサンドリアでのギリシア文化教育がなんらか中心的な役割を果たしたことが推測される。

アレクサンドロス大王死後の混乱の中で学芸が荒廃したが、前2世紀ブトレマイオス8世治下のアレクサンドリアで“*ἐγκύκλιος παιδεία*”が復活したと、アテナイオスが報告している（4.184b）。これはそういった事情の反映かもしれない。

#### (4) まとめ

“*ἐγκύκλιος παιδεία*”という概念を見る限り、古代の「自由学芸」がギリシア古典期に遡るという通説は根拠を持たない。各学科は個別に研究・教授されていたが、それらが教育課程として包括されていたように見えないからである<sup>6)</sup>。ローマ人がギリシアに範を求めた時、直接に参照されたのはヘレニズム後期のアレクサンドリアで展開された理念であった可能性が高い。

## 二 「4科」

次に、「4科」について、古典期からローマ期までの様子を見ていく。

### (1) ソフィスト的背景

「自由学芸」の基本理念は、前5～4世紀に活躍したソフィストたちに遡る可能性がしばしば指摘される。ソフィストは職業知識人として自由市民の教育に従事し、大きな影響力を揮った。その代表者ヒッピアスは「博識」（*πολυμαθία*）で知られており、「算術、天文学、幾何学、音楽」を中

---

*ebrietate* 33, 49, 51, *De sobrietate* 10, *De migratione Abrahami* 72, *Quis rerum divinarum heres sit* 274, *De congressu eruditionis gratia* 9, 10, 14, 19, 20, 23, 35, 72, 73, 79 (bis), 121, 154, 155, 156, *De fuga et inventione* 183, 213, *De mutatione nominum* 229, *De somniis* 1. 240, *De vita Mosis* 1. 23, *De specialibus legibus* 1. 336, *Quod omnis probus liber sit* 160, *Legatio ad Gaium* 166, 168. なお、フィロンの重要性、とりわけ『予備教育のための交わりについて』について、土橋茂樹氏より教示を受けた。

6) マルー、前掲書174頁、小林、前掲書45頁の「一覧表」のうち、とりわけ古典期からヘレニズム期の項は、多様な情報の混交であり証拠として効力をもたない。

心とする学問を幅広く教授していた（プラトン『プロタゴラス』318E）。彼の活動を証言するプラトン対話篇では、「算術、幾何学、天文学；文学；記憶術」（『ヒippias小』366C-369A）、「天文学、幾何学、算術、文法・文学（韻律）・音楽、歴史；記憶術」（『ヒippias大』285B-286A）が列挙される。フィロストラトスは「幾何学、天文学、音楽、韻律」という学科を挙げている（『ソフィスト列伝』I.11.1）。これらのリストは、後世の「4科」を含んでおり、一部「3学」も収める。

だが、これがソフィスト一般の教育プログラムであったとは考えにくい。プロタゴラスは「人間の教育、徳の教育」を掲げて、ヒippiasのような多様な学科の教授を批判していた（『プロタゴラス』318E）。数学には、そのプロタゴラス自身もアンティフォンら他のソフィストも一定の関心を持っていたが、それがピュタゴラス派や、キオスのヒッポクラテスら当時の数学研究とどう関わっていたかは、不明である。

ソフィストはそもそも一定の理念や教説を共有するグループではなく、互いに対抗して教育にあたる個人で、共通の体系的な教育プログラムを持っていなかった。彼らが「弁論術」を教育の中心に据えていた点は疑いがないが、数学諸学の必要性については評価が分かれていた。

## (2) プラトンとその伝統

プラトン『ポリテイア』第7巻の高等教育論に含まれる「数学諸学科」は、後世の「4科」ではなく、「算術、平面幾何学、立体幾何学、天文学、音楽」の5科であった。それらは、知性開発のための訓練として課せられ、「問答法」（ディアレクティケー）の予備学に位置づけられている。この独自の教育論は同時代や後世に大きな影響を与えたが、遺作、あるいは弟子がまとめたとされる『エピノミス』では、「算術、平面幾何学、立体幾何学、音階論、天文学」の5科が「神学」の前提として重要視されている（990C-992A）。その箇所は、『法律』第13巻の議論として、ゲラサのニコマコス『算術入門』1.3.5で言及されている。

古アカデメイアにおいては、クセノクラテスに見たように、数学、とりわけ、幾何学が重視された。この伝統は、中期プラトン主義の時代、前1世紀に新ピュタゴラス主義が興隆してプラトン主義と重なることで、ローマ時代に再び大きな意義を担う。

### (3) プラトンへの対抗

数学の重要性を明瞭に打ち出したプラトンとアカデメイアに対して、同時代に活躍した弟子アリストテレスや弁論家イソクラテスらは、それらを教育課程の中核に据えることに反対した。アリストテレスは、後にユークリッドに結実する数学の学問論証に方法論上の意義を認めていたが（『分析論後書』の学問論）、自身の哲学体系では数学を抽象に過ぎないとして排除していた。ゴルギアスやヒippiアスらソフィスト教育の伝統をひくイソクラテスも、数学に教養の役割しか認めず、観想的学問を強調するプラトンを批判して、実践的な知恵を培う弁論術や歴史研究の役割を強調した（『アンティドシス』<sup>7)</sup>。

### (4) ローマへの継承

数学諸学科を「4科」(quadrivium)の名で呼んだのは、ボエティウス『算術教程』である<sup>8)</sup>。そこでは、ピュタゴラス派の伝統と「哲学」に向けての知性の涵養が謳われ、明瞭にプラトンの教育論の継承が確認される。マルティアヌス・カペラは「幾何学、算術、天文学、音階論」を論じ、ボエティウスは、「算術、音楽、幾何学、天文学」の順で論じていた。それらの順と位置づけは、プラトン『ポリテイア』の教育課程と同じではないが、数学を高等教育の中核に据える教程はピュタゴラス派とプラトン主義に特徴的であり、その伝統がボエティウスらを通じて「4科」の形でラテン中世に流入したことは確かである。

### (5) 位置づけの問題

「4科」それぞれの内容についても詳細な比較検討が必要であろうが、大きな問題点は、通常教育科目と哲学上の理論学との関係にある。ギリシアでは古典期に高度な「数学」が発達し、一般にもある程度普及していたことがプラトン対話篇から窺われる（『メノン』『テアイテトス』等）。だが、一般人の教育における関心は、幾何学や算術の日常的な実用知識にあり、天文学についても、航海や農耕など、伝統的な実践場面での知識が求められていた。プラトンが考える哲学に向けた純粹理性の観想訓練は、

7) 廣川洋一『イソクラテスの修辞学校』岩波書店、1984年（講談社学術文庫、2005年）参照。

8) 周藤多紀「ボエティウスと自由学芸の伝統」（本号）参照。

同僚の数学者たちの理念とも同じではなかったはずだが、それ以上に、当時通用していた数学、天文学、音楽と内実や意図において異なっていた。両者の齟齬は、『ポリテイア』第7巻の教育プログラムでしばしば言及されている。音楽についても、当時、実際に楽器演奏に従事する専門家の知識と、音階や韻律やリズムについての高度に抽象的な理論、つまり数学の一部としての音楽の隔たりは大きかった。この点は、後にセクストス・エンペイリコスが『音楽家たちへの論駁』で指摘している（『学者たちへの論駁』6.1, 38）。

「4科」の位置づけでは、さらに、数学諸学と哲学との連関が問題になるが、プラトンの場合には「問答法」、後の「弁証論」が哲学に当たるため、「3学」との関係が問われることになる。

### 三 「3学」

古典期からある程度のまとまりを持って扱われた「4科」に比べて、「3学」(trivium)については事情が複雑で、それらが一群にされた経緯は不明である。

#### (1) 弁論術

「弁論術」(ῥητορικὴ)を作り教育に導入したのは前5世紀後半のソフィスト、具体的にはアンティフォン、プロタゴラス、ゴルギアス、ヒッピアス、プロディコスらであった。プラトンは「哲学」(φιλοσοφία)との対比でそれを厳しく批判し、アリストテレスもその技術を理論整備したとはいえ、自身の学問体系で重視してはいない。エピクロス派などヘレニズム期の諸学派も概して弁論術に批判的であり、哲学からは否定的に扱われていた。

他方で、ソフィストの流れではイソクラテスが前4世紀初めに修辞学校を設立し、「弁論術」を中心とした教養・教育理念を積極的に打ち出して有力な弟子を育てた。その学校は一代限りであったが、彼の教育伝統は間接的にキケロらに受け継がれる。

ヒッピアスやイソクラテスは弁論術にとって「歴史」の知識が重要であると考え、その研究にも従事した。ヒッピアスは多様な歴史記録を編纂したと言われており、イソクラテスの修辞学校はエフォロスやテオポンポスら歴史家を輩出した。キケロ『弁論家について』2.51-62が「歴史」の重要性を強調するのもこの伝統である。だが、歴史が独立科目として扱われ

なかったのは、「弁論術」教育に吸収されたからかもしれない。

## (2) 文法学

「文法学」(γραμματική)は、子供たちに読み書きを教える文字(γράμματα)の学習としては前5世紀以前から存在したが、学問的な内容を備えるのはプロタゴラス、プロディコスらソフィスト以来であり、主にストア派で理論が整備されたと考えられている<sup>9)</sup>。だが、「文法学」を教育の基礎におく発想は、プラトンやアリストテレスには無縁であった。プラトン『ポリテΙΑ』第2～3巻の「学芸」(μουσική)が一部含むかもしれないが、両者の関係は直接的ではない。

「文法学」という理念は多義的であり、セクストス・エンペイリコスはその混乱を指摘している。一つは、文字の綴りの読み書きを習う文法学習であり、「下級文法」と呼ばれる。第二に、アレクサンドリアで前3～2世紀に栄えた文献学が同じ「文法学」の名で呼ばれる。これは、カリマコス、ビザンティオンのアリストファネスらによる古典文献の批判的研究であり、「上級文法、完全文法」とも呼ばれる。第三に、ストア哲学において成立し、前2世紀のディオニュシオス・トラクスに代表される、いわゆる「文法学」、つまり「技術文法、方法文法」がある。サモトラケのアリスタルコスの弟子であったディオニュシオスは、「音読、詩の解釈、稀語、語源、類推、審美的批評」の6つを文法学の課題とした。語論を主としながら、文学作品の解釈を含んでいたことが分かる。セクストスは「文法学」の名で、一般的な初等教育(第1種)と特殊な高等学問(第2種)を混同する文法学者たちに批判を投げかけている(『学者たちへの論駁』1.44)。

## (3) 弁証論

「ディアレクティケー」(問答法、弁証論、διαλεκτική)は、エレアのゼノンの創始とも言われるが<sup>10)</sup>、プラトンがソクラテスの対話(διάλογος)の方法をモデル化したもので、プラトン哲学で最高の哲学、数学諸学の上に立つ万学の礎とされた。それに対してアリストテレスは、「論証知識」との対比で、「エンドクサ」に依拠する蓋然的な推論に過ぎないとし、哲

9) Cf. M. Frede, 'The origins of traditional grammar' (1977), *Essays in Ancient Philosophy*, Oxford 1987.

10) アリストテレス断片 65 Rose = DL 8.57, 9.25 参照。



学の訓練として周縁に位置づけた（『トポス論』『ソフィスト的論駁について』）。ストア派は「ディアレクティケー」を「論理学」（λογική）と重ね合わせ、以後はこの経路での受容がなされたようである。内容についても、名辞論理学を体系化したアリストテレスに対して、ストア派は命題論理学を展開しており、「弁証論、論理学」として何が研究・教授されていたかは、学派や時代によって多様である。

#### （4）一括化の問題

論理学の意味での「弁証論」を含む「3学」について、最大の問題点は「4科」の基盤となるプラトン哲学との関係であろう。プラトンにとって「ディアレクティケー」は、数学諸学科での教育を完成する「哲学」そのものであり、彼が批判した「弁論術」や、重視しなかった「文法学」と一緒に扱われることはあり得ないからである。とすると、「3学」形成の背景は、ローマから中世にかけての屈折した受容の過程によるものと考えざるを得ない。その要因として、「弁論家」を哲学と弁論術を融合する理想の知識人、実践家としたキケロの『弁論家について』の影響が推定される。キケロは、ギリシアの伝統で対立する「哲学／弁論術」をあえて統合する明瞭な意図を抱き、彼の実践的な哲学はローマ社会に親和的だったからである。実際「弁論術」は、抽象的な理論に終始しない実践的な学問・技術として、共和制ローマで大きな役割を果たし、帝政期にも「第2次ソフィスト思潮」で文化の中心となるからである。「弁証論」は、プラトンの元理念とは離れて、一般的な論理学の教程として「3学」に位置づけられたものと推定される。

### 四 「自由学芸」の歴史的背景

以上の考察を受け、「自由学芸」にまとめられる教育がギリシア古典期から古代末期にたどった状況を、簡単に整理しておきたい。

前5世紀半ば以前のギリシア社会で教育は組織化されておらず、社会の上流層が私的に子弟に教育を受けさせていた。ある程度まとまった教育が一般市民に与えられたのは、民主政アテナイでソフィストが活躍するようになってからである。それは、自由市民が政治活動に携わるための教育であり、「弁論術」を中心に、後に「文法学」と呼ばれる文芸批評や数学などの諸学科が含まれていた。しかし、ソフィストと呼ばれる人々の教育や理念はそれぞれ大きく異なっており、その歴史的意義を過大評価はできない

い。

プラトンの学園アカデメイアは学問・哲学の中心として古代を通じて影響を持ち、「4科」および「弁証論」の基盤となった。そこでの数学を中心とした教育を批判したイソクラテスは、弁証術の学校で一般教育を「哲学」と見なして教授し、アリストテレスの学校リュケイオンでも体系的な学問が追究された。ヘレニズム期には哲学の諸派が学校を作って研究や教育に当たったが、「哲学」と「予備教育」は、それぞれ異なった関係で位置づけられていた。

ソフィスト的「弁証術」とプラトン・アカデメイアの「数学、哲学」という二つの伝統は、ローマでの受容にあたって、キケロの「人間性」(humanitas) 理念において融合される。それが、クインティリアヌス、アウグスティヌスらラテン世界に影響を与えたことが推測される。

紀元後のローマ世界ではプラトン主義、新ピュタゴラス主義が興隆し、ラテン語に導入された背景が重要であり、当時の科学の展開との関係も注目される。また、キリスト教の布教に伴い、それらギリシアの学問がキリスト教の教程に取り入れられた経緯も重要である。例えば、カッシオドルスが聖書読解を目的に「文法学」を積極的に位置づけた点が注目される。

以上の考察から、「自由学芸」とは、ギリシアで確立された教育体系がローマにそのまま受容されたというより、ローマ人が教養・教育を整備するに当たって古代ギリシアからの「伝統」として権威化したものと見なされる。少なくとも“ἐγκύκλιος παιδεία”の名称は、ヘレニズム後期のアレクサンドリア以前には顕著に用いられていなかった。

それらの諸学科が学問や教育全体において担う役割は多義的で曖昧であった。(i) 段階的プログラムにおける哲学の準備段階、つまり「予備教育」に当たるのか、(ii) 哲学の一部を成すのか、(iii) まったく独立の一般教養なのか、また、(iv) 諸学を総合する有機的な一群なのか、(v) 修得が必要な学科の区分に過ぎないのか、あるいは(vi) それらの見方が混在していたのか。こういった諸点について、ギリシアからローマへの古代世界では立場によって見方が異なり、統一的な見解はなかった。この論争は、現代の大学教育における「一般教養」の位置づけに関しても同様に続いているが、古代に統一的な規範を求めることはできない。

---